

麦のふっ



楽しさいっぱいの名作
を集めました



世界のお話 7 こども図書館

一 つぶの麦

昭和四十三年十二月二五日印刷
昭和四十四年一月一日発行

定価 五〇〇円

著者―花岡大学

発行者―横山実

印刷者―上田庄之助

発行者―大阪教育図書株式会社

東京都千代田区神田錦町三の一七

大阪市東住吉区田辺西の町六の四

郵便番号東京―一〇一 大阪―五四六

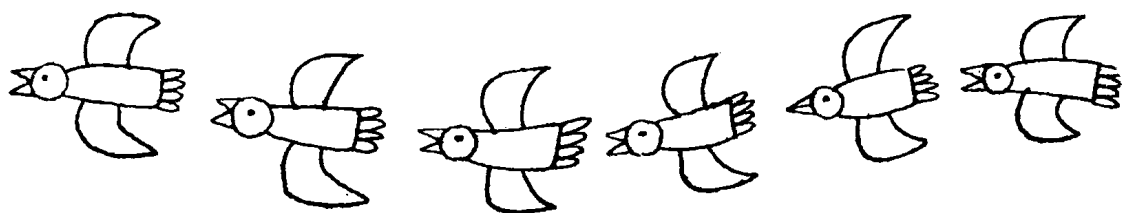
©1969・花岡大学・上田印刷・倉橋製本
落丁本・乱丁本はお取り替えます

さるのてぶくろ

花岡 大学



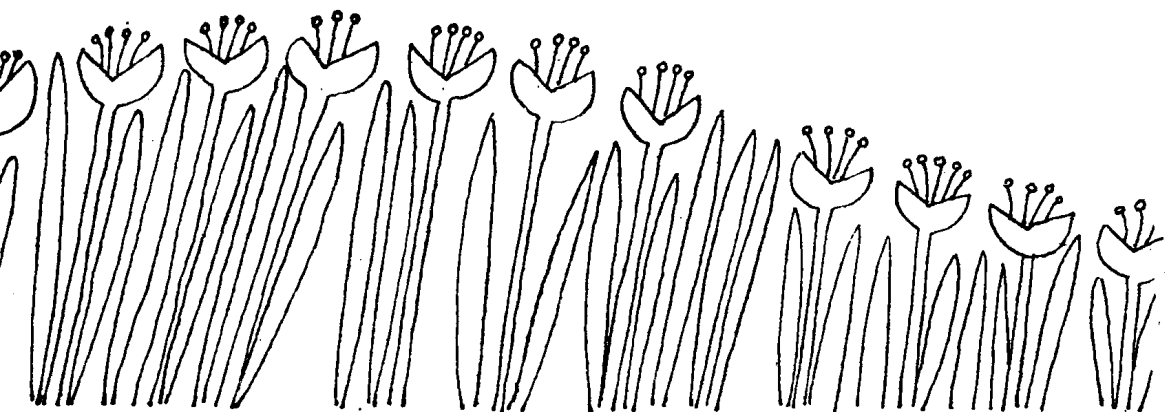
大阪教育図書



は じ め に

この本は、名高い世界の童話、民話、神話のなかから、もっともすぐれたお話を、いくつかつづらびだしてつくったものです。

そのいずれもが、きっと、みなさん方の心をとらえてはなさないでしょう。こどものころに、そういう経験をもつということが、人間を形づくる上に、とても大切なことなのです。読んだあと、おかあさんといっしょに、いろいろと話しあってください。



はじめに

● 童話 ●

馬にのったコデイヴァ夫人 九

どろぼうのまじない 一七

おしゃべりがめ 二四

一つぶの麦 三〇

＊ 民話 ＊

ジャックの幸運 四二

ブラジルのかぶとむし 五〇



あほうカラス 六

いぬとねことねことねずみのはなし 四

◇ 神 話 ◇

がらくたふくろ 五

石屋のピエトロ 五

ラムバカルナというかしこいうさぎ 五

はまべのおひめさま 四

* *

お話の解説 一七



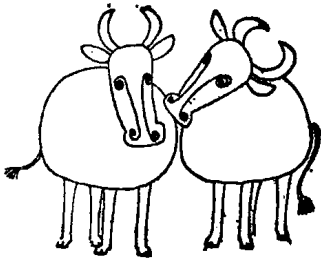


■ 装幀

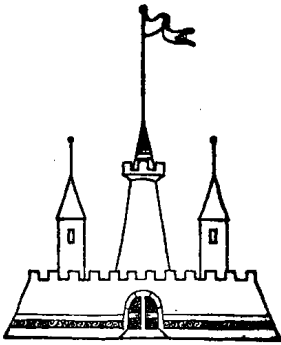
尼谷 義雄

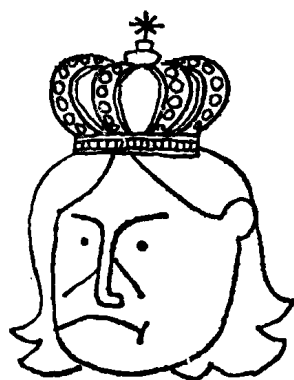
■ さしえ

大古 尅己
大竹 昌夫



童話





馬^{うま}にのったコディヴァ夫人^{ふじん}

むかし、イギリスのカベントリーという町^{まち}に、レオフリックという、とのさまがありました。とのさまは、町の人^{まちひと}たちに、通行税^{つうこうぜい}をかけていました。

通行税^{つうこうぜい}というのは、町^{まち}の入口や出口に役所^{やくしょ}をもうけて、そこを通る人^{とおひと}たちから、税金^{ぜいきん}をとってたてることなのです。

しかもそれが、たいへんおもしろい通行税^{つうこうぜい}なので、町の人^{まちひと}たちは、ひじょうにこまっていました。だからといって、税金^{ぜいきん}をはらわないと、すぐつかまって、ろうやにほうりこまれてしまうのですからたまりません。

町の人^{まちひと}たちのくらしは、だんだんくるしくなり、よるとさわると、ひどい王^{おう}さまのしうちをうらんたり、なげいたり、ぶつぶつ不平^{ふへい}をこぼしたりいたしました。

どのさまの奥方おくがたの、コディヴァ夫人ふじんは、たいそうなさけぶかい、やさしい人ひとでした。

コディヴァ夫人ふじんは、町まちの人たちひとのそういう不平ふへいや、なげきのこえをきくのが、つらくてたまりませんでした。

なんとかして、町まちの人たちひとを、しあわせにしてあげたいと、いつもかんがえていましたが、町まちの人たちひとの不平ふへいや、不満ふまんは、一日いちにち一日いちにちとつる一方いっぽうです。

それである日ひのこと、とうとうみるにみかねたコディヴァ夫人ふじんは、どのさまにむかって、思おもいきつてたのんてみることにいたしました。

「すこし、おねがいたいことがございます。」

「あらたまつて、なんだね？　どんなねがいなのかいつてごらん。」

「はい、わたくしのおねがいたいことは、通行税つうこうぜいのことでございます。町まちの人たちひとはあの税金ぜいきんで、たいそうこまつております。かわいそうでございますから、どうか一日いちにちも早く、通行税つうこうぜいをとりたてることだけ、おやめになつていただきとうございます。」

それをきくと、どのさまは、にわかにこわい顔かおになつて、

「いや、お前まえのせつかくのたのみだが、それはいけない。」

と、きつぱり、おこわりになりました。

「なぜ、いけないのでございますか。町の人たちがあんなにこまっているのを、知らない顔をして、みすこしているということは、神さまにたいしても、すまないことではないでしようか？」

「お前は、なんにも知らないから、そんなのんきなことをいつておられるのだ。通行税は、いまわしにとつて、いちばん大きなみいりなのだ。そいつをとoryやめてみる、わたしたのくらは、たちまちこまつてしまふ。こともあろうに、お前から、そんなばかばかしいたのみを聞くとは、おもわなかつた。」

「でも、いくらわたしたちのくらしがこまつても、大ぜいの町の人たちが、しあわせになれることなら、いっそ、思いきつておやめになつたら……。」

「やかましい、だまつてろ！」

と、とうとう、とのさまはすっかりおこつてしまつて、コディヴァ夫人をにらみつけながらどなりました。

「もう、なにもききたくはない。いいか！これからは、通行税のことについて、お前はいつ

さいしゃべつてはならんぞー」

となりつけられて、コディヴァ夫人は、ふかいためいきをつきながら、その日は、自分の部屋へひきとりました。

だが、それっきり、あきらめたわけではありません。

とのさまの、ごきげんのいいときをみはからつては、そののちもそのことを、なんべんなくおたのみになりました。

コディヴァ夫人は、自分の力でできることなら、なんとしてでも、町の人たちをしあわせにしたい心で、いっぱいなのでした。

とのさまは、それがうるさくてたまりません。

それで、あるとき、ひとつ夫人をいじめてやろうと思つて、

「よし、そんなにお前が、通行税をやめてほしいのなら、どうだ、はだかて馬にのつて、みんなのみにている前を、町のはしからはしまで、あるいてきてみないか。ええ？ そしたら、お前のかえつてくるのをまつて、お前のぞみどおり、通行税は、やめにしてやる。」

「はだかて？」

「そうさ！ まっばだかでなければ、おもしろくない。できるなら、やってみるがいい、はっはは……。」

夫人は、しばらくじっとかんがえておられましたが、やがて、きらきらと目をひからせながら、とのさまをみあげて、たずねました。
「あなたの、おのぞみどおり、わたしがまっばだかでかけましても、あなたはそれを、おゆるしくださるのですね？」

「ああ、ゆるしてあげるとも、やってみるがいい、やれるなら！」

「はい、これからすぐにやってみます。」

大ぜいの人たちのみている町の中を、はだかで馬にのってあるくなんて、思っただけで

馬にのったコディツァ夫人



も、死ぬほどはずかしいことでした。

でも、そうすることによつて、町の人たちがすぐわれるのなら、そのはずかしさは、じつとがまんしなければならぬと、コディヴァ夫人は、かたく決心したのでした。

そのうわさは、またたくあいだに、町中にひろまりました。

町の人たちは、びっくりしたり、よろこんだりして、はなしあいました。

「なんという、ありがたいお心だろう。」

「みんなわたしたちのためなんだ。もったいなくてなみだがこぼれる。」

「なあ、おい、みんな、コディヴァ夫人は、ほんとにおはすかしいにちがいない。それでな、夫人が馬にのつて、町をお通りくださるときには、わしたち町の者は、一人のこらず戸を閉めて、夫人のおすがたを、ぜったいにみないということにしようじゃないか。」

「それはいいかんがえだ。さっそくみんなにふれて、そうしよう。わしたちを、しあわせにしてくださいと、一生けんめいになってくださる。そんなとおといおすがたをみたりしたら、まったくばちがあたるぞ。」

町の人たちは、わいわいさわぎたてながら、そんなことをくちぐちに、はなしあいました。

そして、いよいよ、ふさふさとしたながい黒髪をほどこいて、それではだかのからだをかくすようにされながら、コディヴァ夫人が馬にまたがって、町のはしからはしへと、おあるきになりましたときには、人通りは、ぴたりとどだえ、町の家々は、一軒のこらずかたく戸をしめて、死んだようにひそまりかえっております。

もちろん、だれ一人、はだかの夫人をみようなどという、いけないかんがえを、おこしたものもいませんでした。

それで、コディヴァ夫人は、あまりはずかしい思いをされずに、ご殿へひきかえしてこられますと、よろこびいさんで、とのさまの前へとんでいつて、

「さあ、おやくそくどおり、通行税をおやめくださいませ。」

と、たのみました。

さすがのどのさまも、コディヴァ夫人のおなさけぶかいお心と、みんなのしあわせのために、自分のはずかしさやくるしさをのりこえて、ちよつとやそつとでだれにでもできそうにないことを、見事にやりおおせた勇氣とに、すっかり感心して、

「よくやった、いいとも、いいとも、お前なのぞみどおり、今日かぎり、通行税はやめるこ